翻訳

ディオドロス「世界史」

竹島俊之　訳

ディオドロスは前一世紀のシシリアのアギュリオン（現アギラ）出身の歴史家である。40巻のかれの『世界史』は世界の創世記からカエサルのガリア戦争の始まり（前六〇／五九年）までを包括している。そのうち一―五巻と一一―二〇巻が完全な形で伝承されていて、残りは断片と抜粋である。

エジプトについての叙述（一巻一〇―九八）、インドについて（二巻三五―四二）、アラビア湾沿岸の民族について（三巻一二―四八）、合理主義的な神話解釈について（六―一五巻）の記述は民族誌および地方史的観点で重要である。一一―二〇巻は歴史的観点で重要である。[1]

二三巻（第一次ポエニ戦争）からは中心部分にギリシャを置いたローマ史である。一一―一五巻：古典時代の歴史、一一―二一巻：前四八〇―二八九／八年のシシリア史、一六巻：フィリッポスⅡ世、一七巻：アレクサンドロス大王、一八―二〇巻：ディアドコイ史、七―一二巻：初期ローマ史、二八―三二巻：前一七一―一四八年のローマ史、三三―三八巻：前一四六―八八年のローマ史。[2]

ディオドロスはオリンピア期、アテナイのアルコン、ローマの執政官にしたがって年代記的資料に基づいて時代区分している。

つぎにその内容をいくつかテキストの翻訳という形式をとりながら紹介してみよう。

（1）パウサニアスとテミストクレスの末路

---

1 『ディオドロス神代地誌』飯尾都人　龍渓書舎一九九七年は一巻―六巻までの完訳。

2 Der Neue Pauly Enzyklopädie der Antike 1997.

サラミスの海戦でペルシャ艦隊に勝利したギリシャの艦隊を指揮した提督アテナイ人のテミストクレス、およびクセルクセス王が退却した後、マルドニオスの率いる五十五万人のペルシャ陸軍をプラタイアで破ったときのギリシャ陸軍の総指揮官ラケダイモン人のパウサニアスの末路をディオドロスはつぎのように記述している。

パウサニアス

（一一巻）四四ラケダイモン人はプラタイアにいるパウサニアスを提督に任命し、異民族の守備隊がまだ駐留しているかぎりのギリシャ人の都市を自由にするように命じた。(二)かれは五十隻の三段櫂船をペロポネソスから受け取り、アリステイデスが指揮をとっていた三十隻をアテナイから呼び寄せ、まずキプロスへ航行し、都市のうちまだペルシャ人の守備隊がおかれているものを自由にした。(三)その後、ヘレスポントスへ航行し、ペルシャ人によって押さえられているビュザンティオンを屈服させた。ほかの異民族のうちある者は殺し、ある者は追い出して、都市を自由化した。そこにいたペルシャ人の多くの重要な人物を捕虜にして、表向きは罰するために見張るようにと、実際はクセルクセスへと救うようにとエレトゥリアのゴンギュロスに渡した。すなわちパウサニアスはひそかに王と友好関係をむすび、ギリシャ人を裏切るためにクセルクセスの娘と結婚しようとしていたのである。(四)これを取り図ったのは司令官アルタバゾスで、かれはひそかに多額の金をパウサニアスに送っていたのだった。自分たちの敗北に目覚しい働きを示すことができたほどのギリシャ人を堕落させるためだった。

(五)しかし、パウサニアスの計画は明るみにでて、つぎのような方法で罰をうけた。かれはペルシャの優雅さを羨み、従属者たちを専制君主の態度で扱ったので、だれもがかれに立腹した。とくにギリシャ人のうちで何かの指揮へと任命されたものたちがそうだった。(六)それゆえ軍隊のなかで民族ごとに、また都市ごとにたがいに集って、パウサニアスの尊大さを悪く言い、あるペロポネソス人はかれを見捨て、ペロポネソスへと出帆した。また使者を送ってパウサニアスを告発した。アテナイ人のアリステイデス

はその機会を利用して、集会で賢明に諸都市を丸め込みまた個人的な交際によって近づき、かれらをアテナイの味方にした。さらには偶然がつぎのような理由でアテナイ人に手をかした。

四五パウサニアスは自分から手紙を王へ運んだ者たちが戻ってこないように、秘密の密告者とならないようにということを条件として要求した。その結果かれらが手紙を受け取った者によって殺され、誰ひとりとして戻って来ないということになった。(二)そのことを憶測したある急使が手紙を開け、手紙を運んだ者の死が本当だと知り、手紙を監督官にさしだした。(三)しかしかれらは開封された手紙を受け取ったために信用せず、もっと信頼できる証拠を要求し、その男はパウサニアスが同意するようにしようと申し出た。(四)かれはタイナロスへ行き、ポセイドンの神殿に座り、ふたつのテントを張り、監督官たちとほかのスパルタ人を隠した。パウサニアスが来て、なぜ嘆願者となっているのか、と尋ねると、かれは自分にたいする死を書き込んだ手紙を差し出して、かれを非難した。(五)パウサニアスは「すまん」と言い、謝罪をこい、秘密にしておくように頼み、大きな贈物を約束して別れた。監督官たちおよび彼らといっしょにいた者たちは真実を正確に知ったが、そのときは静かにしていた。(六)のちにラケダイモン人が監督官とともにこの件をとりあげたとき、かれは先にそれを察知して、青銅の家[1]のアテネ神殿に逃げた。ラケダイモン人たちが嘆願者を罰するのを躊躇していると、社に来たパウサニアスの母が何も言わず、何もせずただ煉瓦を手に取り、社の入口に置いて家に帰った。(七)ラケダイモン人は母の判断にしたがって、入口を壁でふさいだ。パウサニアスはこうした方法で死ぬことを余儀なくされたそうである。死体は葬るように縁者に渡された。しかし神は歎願者の安全が破られたことにたいする立腹を示した。(八)すなわち、ラケダイモン人がほかのことについて神託をうかがったとき、神は歎願者を元にもどすように命じる神託をあたえた。(九)それゆえスパルタ人は神託の命令を実行することは不可能だと考えて、神によって命じられたことが実行できず、ながいあいだ困惑していた。しかし可能なかぎりのことを協

1 スパルタにある有名な社。

議して、パウサニアスのふたつの青銅の立像をつくり、アテネの社に奉納した。

四六われわれは歴史書全体にわたって、良い人の場合はそれに言及することによって称賛してその栄光を増大させ、悪い人の場合は死んだときに適切な非難の言葉を発するのを習慣としている。そこでパウサニアスの悪徳と弁解の余地のない裏切りも許さないことにしよう。(二)ギリシャ人の恩人となり、プラタイアでの戦いに勝利し、ほかの多くの称賛すべきことをなしとげたその人が、受けた名声を守りとおすどころか、ギリシャ人の富と贅沢を愛して、すでに前に存在していた名声を辱めたこの人の愚かさに驚かない人がいるだろうか。(三)幸運で大得意になってラコニア的生き様を嫌い、ペルシャ人の放縦と贅沢を真似し、異民族の生活習慣を羨む理由はいささかもなかったのである。すなわち、かれは他人から学んだのではなく、自らためして、祖国の生活様式がペルシャ人の贅沢よりどれほどすぐれているかを認識していたからである。

テミストクレス

(一一巻)五四　アテナイではプラクシエルゴスがアルコンだったとき、ローマ人は執政官としてアウルス・ウエルギニウス・トゥリコスツスとガイウス・セルウィリウス・ストゥルクツスを選んだ。このとき、大小の都市に住んでいたエリス人はエリスとして知られるひとつの都市に合併された。(二)ラケダイモン人はスパルタがかれらの司令官パウサニアスの裏切りのために卑下された状態にあり、アテナイ人がかれらのあいだで誰一人裏切りで告発されていないために高く評価されているのを見て、アテナイ人を同じ非難に巻き込もうと懸命だった。(三)それゆえにテミストクレスがかれらのあいだで高い評価をうけ、高潔な性格という点で大きな名声をえていたので、かれはパウサニアスの最大の友達であり、かれと共謀してギリシャをクセルクセスに売ろうとしていたと主張して、かれを裏切り者と非難した。(四)かれらはテミストクレスの敵と話し合い、かれらを告発へと駆り立て、金をあたえて、パウサニアスがギリシャを裏切ろうと決意したとき、テミストクレスに自分の計画を明らかにし、この目標を共同でおこ

なおうと誘った。なるほどテミストクレスはその頼みを受け入れはしなかったが、友達であるこの男を告発しなければならないと決定もしなかった、とかれらは説明した。5テミストクレスは告発されたが、その時は裏切り者という判決を逃れた。それゆえに最初、無罪を申し渡された後もかれはアテナイ人のあいだでは偉大な存在だった。市民たちはなされた業績でかれをとくに愛していたからである。その後、かれの卓越を恐れた人々、名声を妬んだ人々がかれの功労を忘れ、かれの力と誇りを貶めようと懸命になりはじめた。

五五かれにたいして陶片追放と呼ばれるものを適用して、都市から遠ざけた。この陶片追放というのはアテナイでペイシストラトスと彼の息子の僭主の転覆後、立法化され、この法律となったのである。(二)市民の各人が陶片に民主制を転覆さすことができると思われる人の名前を陶片に書いた。その陶片が最も多くなった人は祖国から五年間追放されることが命じられた。(三)アテナイ人がこの法律を制定したのは悪行を罰するためではなく、優れた人々の思い上がりを追放によって低くするためだったように思われる。テミストクレスはこの方法で陶片追放され、祖国からアルゴスへ逃げた。(四)ラケダイモン人はこのことを知り、運命がテミストクレスを攻撃する機会をあたえてくれたとみなして、ふたたびアテナイ人に使節を送り、パウサニアスと裏切りを共謀したとしてテミストクレスを告発した。そしてギリシャ人にとって共通の悪事であるから、裁判はアテナイ人のあいだでだけでなく、その頃集まるのが習慣となっていたギリシャの一般集会でおこなわれねばならない、と主張した。(五)テミストクレスはラケダイモン人がアテナイ人の都市を中傷し、辱めようと努力を傾け、アテナイ人が差し出された非難について弁明することを望んでいるのを見て、自分を一般集会に引き渡そうと考えた。(六)この集会は判決を正義にもとづいてではなく、ラケダイモン人にたいする好意からすることをかれは知っていた。このことをほかの事例から、勝利の褒賞について決定したことから推論していた。この場合、投票を支配する者たちはアテナイ人にたいして妬みの態度を示し、戦いに参加した他の国すべてよりも多くの三段櫂船を差し出したにもかかわらず、かれらをほかのギリシャ

人よりも勝利に大きく貢献したとはしなかった。(七)このことによってテミストクレスはその会議に信用をおかないということになった。さらにテミストクレスが前回アテナイでおこなった弁明からラケダイモン人は後の告発の根拠点をえたのである。(八)すなわちテミストクレスはその弁明のなかでパウサニアスがかれに手紙を送り、裏切りを共にするように誘ったことに同意している。これを最大の証拠として、もしかれが最初の要求を拒否しなかったら、パウサニアスはかれにしきりに勧めなかっただろうということを確証したのである。

五六この理由のために、上で述べたように、かれはアルゴスからモロッシア人の王アドメトスのもとへ逃げた。そしてアドメトスの寵に避難して、かれへの嘆願者となった。王は最初はかれを親切にうけいれ、勇気をだすように励まし、かれの安全のためにすべてのことに意を用いようと約束した。(二)ラケダイモン人は最も名高いスパルタ人のいく人かをアドメトスに送り、かれを罰するためにその引渡しを求め、かれに全ギリシャ人の裏切り者、破滅さす者という汚名をあびせた。これに加えて、もしかれを引き渡さなかったら、全ギリシャ人と戦争することになるだろと言った。その時王はその脅しを恐れたのだが、嘆願者に同情し、そして引き渡すという恥を回避して、ラケダイモン人に気付かれずにすぐに立ち去るよう説得し、逃亡の路銀としてたくさんの黄金を贈物としてあたえた。(三)あらゆる所で追い立てられていたテミストクレスはその黄金をうけとり、夜のうちにモロッシア人の領域から逃げた。王は逃亡にかんするすべてのことでかれに協力し、リュンケスティア人で、商人であり、そのために道に経験のあるふたりの若者を見つけ、かれらとともに逃亡させた。(四)夜だけ旅をして、ラケダイモン人を逃れ、若者の好意と苦労によってアジアへ達した。ここにテミストクレスはリュシテイデスという名で、名声と富で高く評価されていた個人的な友達をもっており、かれのもとへ逃げ込んだ。(五)リュシテイデスはたまたまクセルクセス王の友達でもあった。クセルクセス王が小アジアを通ったときにはペルシャ人全員をもてなした。そのためにかれは王と親交をもっていて、テミストクレスに同情し、救おうと望み、すべてのことにかれに協力すると約束した。(六)テミ

ストクレスが自分をクセルクセスの所へ連れて行くよう要求すると、最初は拒否した。ペルシャ人にたいしてかれによってなされたことのために罰せられるだろうと、主張して。あとで、それが最善だとわかって、その要求に応じた。そしておもいがけなく、無事にかれをペルシャに救出した。(七)ペルシャ人のあいだには妾を王のもとにつれていく人は彼女を閉ざされた車ではこび、連れられていく人と面と向かって会わないという習慣があった。リュシテイデスは計画にこの手段を使うことにした。(八) 高価な帳で飾られた車を用意し、それにテミストクレスを乗せ、まったく安全に救い出し、王と会い、用心深く王と話をし、かれに危害をくわえないという保証をえた。かれを王のもとにつれていき、王はテミストクレスに言葉をかけ、なにも不正をしていなかったと知り、無罪を申し渡した。

五七かれは思いがけず敵によって救われたと思ったが、つぎのような理由でふたたびもっと大きな危険に遭遇した。マンダネーはマギを殺したダレイオスの娘で、クセルクセスの本当の姉妹で、ペルシャ人のあいだで最も尊敬されていた。(二)彼女はテミストクレスがサラミスでペルシャ人と海戦したときに、息子たちを奪われ、子供たちを奪われたことを憤り、不幸の大きさのために人びとのあいだで同情されていた。(三)彼女はテミストクレスの到来を知ると、喪服を着て王のもとに来て、涙を流して兄弟がテミストクレスに罰を課すように頼んだ。王が彼女に耳を貸さないでいると、ペルシャ人の貴族を訪ね回って頼み込み、人びとをテミストクレスへの復讐へと駆り立てた。人びとは王のもとへ走り集まり、大声をあげてテミストクレスへの復讐を要求した。(四)王はペルシャ人の貴族からなる法廷を設置し、その評決を実行しようと答えた。(五)皆が同意し、審理を準備するためにじゅうぶんな時間が設定されたので、テミストクレスはペルシャ語を学び、弁明のさいにこれを用いて、告発から無罪放免された。(六)王はこの男が救われたことを非常に喜び、大きな贈物で名誉をあたえた。かれと結婚させるために、生まれと美しさで秀でているペルシャ人の女性をあたえた。彼女はその美徳によっても称賛をうけていて、そして彼女の世話をするためのたくさんの召使をつれてきただけでなく、楽しみと贅沢にふさわしいほかの家

具・調度品をもってきた。(七)食糧とふさわしい快楽を提供するために三つの都市があたえられた。すなわち、アジアで最大量の食糧を提供するマイアンドロス川沿いのマグネシアをパンのために、副食物のために魚の豊富な海をもつミュオスそしてぶどうの木が育つ多くの土地をもつランプサコスがぶどう酒のためにあたえられた。

五八テミストクレスはギリシャ人のあいだにいたときに感じた恐れから解放され、最大の奉仕をした人々によって思いがけず追放され、恐ろしいことを蒙った人々によって親切にされ、これらの都市で暮らし、楽しみのためのあらゆる良いものを手に入れて、マグネシアで亡くなり、今日まで残っている立派な記念碑をえた。(二)いく人かの歴史家は言う、クセルクセスはギリシャにたいして二度目の遠征をおこなうことを望み、テミストクレスを戦争の指揮をとるように招き、かれはこれに同意して、誓いの下で、テミストクレスを連れずには、ギリシャへ遠征に行かないという保証を王からえた、と。(三)そして一頭の牡牛が犠牲に捧げられ、誓いがなされ、テミストクレスは牡牛の血の一杯に入った酒盃を飲み干し、ただちに死んだと。クセルクセスはこの計画を断念し、テミストクレスは自殺によって、ギリシャ人にたいして立派な行動をとったという美しい弁明を残した。

(四)われわれはギリシャ人のうちで最も偉大な人の最期のところにきている。かれについては多くの人が論争している。かれは祖国とほかのギリシャ人にたいして不正をして、ペルシャへ逃げたのだ、とある人は言い、あるいは逆に都市とすべてのギリシャ人はかれの手で大きな恩恵をうけ、そのために感謝することを忘れ、その恩恵者を不正に最大の危険へと追い込んだのだ、とある人は言う。(五)もし嫉妬心をもたずに、その人の性格と業績を正確に調べたら、この両方の点で、われわれが記憶している人々のうちで第一人者であったことがわかるだろう。それゆえに、アテナイ人がこのような非凡な人をとり除こうとしたことに驚くだろう。

(2) 第一二巻一ではペルシャ戦役に勝利し、ギリシャが財政的に非常に豊かになり、古典期の華が開いた状況が説明されている。

一人生における不均衡さを考えることを止めると、当然人は当惑を感じる。われわれが良いと考えるものの何ひとつとして完全な形で人には与えられていないし、悪いものも何かの有益なものなしでそれ自体完結しているものは見出されないからである。このことの証拠は考えを過去の業績に、とくに最大のものに向けるとき、えられるだろう。(二)すなわち、ペルシャ人の王クセルクセスのギリシャ遠征はギリシャ人に最大の恐怖を惹き起した。かれらは奴隷にすることのために戦争しようとしているのだとして、またアジアのギリシャ人の都市が隷従化されているので誰もがギリシャの都市も同じ運命を経験するのだと考えたのである。(三)戦争は予期に反して、思いがけない結末を迎え、ギリシャに住む住民は危険から解放されただけでなく、大きな名声を獲得し、そして皆が逆への変容に驚くほどの富裕にギリシャ人のすべての都市は満たされたのである。(四)この時から五十年間にわたって、ギリシャは幸福へ向かって大きな前進をとげた。すなわち、この年月の間に、富裕さのために技術が大いに進展し、われわれが記憶している最大の芸術家が生まれた。そのひとりが彫刻家のフェイディアスである。同様に教育でも大いに発展し、そして哲学と弁論術がすべてのギリシャ人の間で尊重された、とくにアテナイ人の間で。(五)すなわち、哲学者はソクラテス、プラトン、アリストテレスであり、弁論家はペリクレスとイソクラテスである。

ペルシャ戦役に勝利し、ギリシャが富裕になり、そしてあの絢爛たる古典文明が華を開いたという誰でもが常識として知っている図式の最初の記述とみなしてよいと思われる。

(3) 十二表法

十二表法は紀元前四五〇年ころ貴族(パトリキ)と平民(プレブス)の闘争の結果として制定され市場に掲示されたと伝えられるローマ最古の法典である。十二表法は、ローマ法発達の出発点をなし、後代のローマ人により、「全公法私法の源泉」、「全ローマ法体系」などと呼ばれて尊重された。制定後約六〇年

をへてガリア人のローマ侵略により掲示板は失われたといわれ、正文は間接に断片的に伝えられるにとどまる。[1]

この法の成立した社会状況について、ディオドロスはこう記述している。

（第一二巻）二三アテナイでプラクシテレスがアルコンだったとき、第八四オリンピア紀[2]が祝われた。トラック競技ではヒメラのクリソンが優勝した。ローマでは十人の男が法を起草する人として任命された[3]。プブリウス・クロディウス・レギラヌス、ティトゥス・ミヌキウス、スプリウス・ウェトゥリウス、ガイウス・ユリウス、ガイウス・スルピキウス、プブリウス・セスティウス、ロムルス（・ロミリウス）、スプリウス・ポストゥミウス・カルウィニウス[4]である[5]。かれらが法律を完成させた。（二）この年、トゥリオイ人がタランティニ人にたいして戦争をし、たがいの地方を陸と海で荒し、小さな戦いと小戦闘を行い、しかし言及に値することは何もしなかった。

二四アテナイでリュサニアスがアルコンだったとき、ローマ人はまた十人を法の起草者として選んだ。アッピウス・クロディウス、マルクス・コルネリウス、ルキウス・ミヌキウス、ガイウス・セルギウス、クイントゥス・プブリウス、マニウス・ラブレイウスそしてスプリウス・ウェトゥリウスである。（二）しかしながら、かれらは法律を完成さすことができなかった。かれらのひとりが家柄は良いが、貧しい乙女を愛し、最初は金でその娘を誘惑しようとした。

1 『世界大百科事典』平凡社1968年。
2 前四四五年―四四一年。
3 有名な十人委員会。
4 資料はこれらの名前と一致しない。ここでのプブリウス・クロディウスはアッピウス・クラウディウスであるべきだ。またディオドロスはA・マンリウス・ウルソとP・クリアティウスの名前を省略している。（C.H.Oldfatherの脚注による。以下同じ。）
5 十二表法、起草された最初のローマ法、法律の二つが第二次十人委員会の下で通過したというのが普通のいいつたえである。しかしディオドロス（二六章一）はそれらは執政官ホラティウスとウァレリウスの下で完成されたと述べる。これはありそうに思われる。十人委員会の正しい年代は前四五一・五〇年である。ホラティウスとウァレリウスは四四九年の執政官である。

しかしかれに心を向けなかったので、奴隷にするように命じて告訴人を彼女の家に送った。

(三)その告訴人は、彼女は自分の奴隷だと言って、奴隷にされた彼女をアルコンのところに連れて行き、アッピウスは彼女を奴隷だとして告発した。アルコンは告発を聞き、娘を手渡し、手先は彼女をとらえて、自分の奴隷として連れ去った。

(四)娘の父がその場に居合わせ、不当な仕打ちに激しく抗議したが、誰もかれに注意を払わなかった。たまたま肉屋のそばを通り過ぎ、板の上に置いてあった大包丁をつかみ、それで娘を打ち、殺してしまった。彼女が暴力の体験をしないためである。かれ自身は都市から逃げて、当時アルギドゥスと呼ばれる所にあった陣営の方へ行った。(五)そして兵士たちの方へと逃げて、涙を流して自分の不幸を伝え、全員を同情と多くの共感へと動かした。全軍が不幸な人を助けようと出撃し、武器をもって夜ローマへ入り、アウエンティネと呼ばれる丘を占拠した。

二五夜が明けると兵士たちが悪人を憎んでいることが判明し、十人の法の起草者たちは同僚を助け、武器によって決着をつけようとして多くの若者を集めた。いまや闘争の気迫が都市にみなぎり、都市の最も賢明な人たちは危険の大きさを予見し、和解のために両者に使節を送った。そして非常な熱意で内乱を止め、祖国を大きな不幸に陥れないよう懇請した。(二)最後には皆が説得され、都市の最高行政官のうちで最大の権威をもつ十人の護民官を選び、かれらが市民の護り手として行動するということにたがいに同意した。また毎年の執政官のうち、ひとりは貴族から選び、ひとりは絶対に平民から任命し、二人の執政官を平民から選ぶ権利さえ民衆にあることとした。(三)こういうことをしたのは貴族の大権を弱めようと望んだからであった。すなわちこの人々は生まれの良さと、先祖からかれらにつき従う名声からさながら都市の主人であるかのごとくだったからである。またその年に任務を果たした護民官にはふたたび同じ数の護民官を任命すること、もしそれをしないならば生きながら焼かれることが同意のうちに契約された。もし護民官がたがいに同意できないならば仲裁する護民官の意志が妨げられてはならないことも決められた。ローマにおける内乱はこのような解決をえるということになった。

二六アテナイでディフィルスがアルコンだったとき、ローマ人は執政官としてマルクス・ホラティウスとルキウス・ウァレリウス・トゥルピヌスを選んだ。この年にローマでは立法が内乱のために未完成となったので、執政官がそれを完成させた。すなわち十二表法と呼ばれるものであり、十人が完成させ、残っている二つを執政官が記載した。問題となっている立法を完成させたあと、それを十二の銅版に執政官が刻み込み、会議場の前に当時置かれていた船嘴演壇に釘付けにした。そのようにして起草された立法は短くて、余分なもののない言葉だったために、われわれの時代まで驚嘆されている。

この記述をオールドファーザーの脚注を用いて整理すると、二三章一の「(第一次十人委員会が)法律を完成させた」という記述は誤りで、脚注5のようになる。すなわち第二次十人委員会で大幅に進められていた起草作業が内乱で中座し、内乱が治まった翌年にそれを執政官が完成させ、銅版に彫り込み、それを会議場の前の船嘴演壇に釘付けにしたということである。

「そのようにして起草された立法は短くて、余分なもののない言葉だったために、われわれの時代まで驚嘆されている」という最後の言葉も興味深く、さまざまなことを想像させる。市民たちは争い事があると、その演壇の前に来て議論し、決着をつけたのだろう。また公文書として記録する必要がないほどに、市民一人一人の頭の中に刻み困れていたのだろう。それはともかく、ディオドロスのこの記述から、十二表法が作成された時代のローマの社会状況のほんの一部が具体的に垣間見られるように思われる。

(4) メトン周期

(第一二巻)三六アテナイでアプセウデスがアルコンだったとき、ローマ人はティトゥス・メネニウスとプロクルス・ゲガニウス・マケリヌスを執政官として選んだ。この年ボスポラスの[1]王スパルタカスが七年統治した後亡くなった。その支配権をセレウコス

[1] ケルチの海峡、王国はアゾフ海周辺のすべての領域を包含していた。

が受け継ぎ、四十年間王位についていた。

(二)アテナイでは天文学で称賛されていたパウサニアスの息子メトンがアテナイのスキロフォリオン月の十三日から開始する十九年周期を公表した[1]。この年の間に星は回帰をおこない、大月[2]のごとく周期をおこなう。それゆえにある人たちはそれをメトン周期と呼ぶ。この人はこの予告と公表において驚くほど幸運であったと思われる。すなわち星はかれが記述した通りの動きと結果を示すからである。それゆえにわれわれの時代にいたるまで、十九年周期を用いるギリシャ人の大多数は真理からそらされないのである[3]。

1 フィロコルスによるとメトンが設定したのはプニンクスの壁の日時計である。

2 プラトン年。歳差運行が一巡すると想像された約二万五千八百年。

3 メトンは「星」と呼ばれたほどすぐれた天文学者だった。メトン周期はすべてのギリシャ人が用いていた太陰年を太陽年に正すのに考案された。この理論は十九年の間に七うるう月を入れることを要求した。現代の計算は二三五月は六・九三九日と一六・五時間、一九太陽年は六、九三九日と一四・五時間であることを示す。ミレトスからの碑文は前四三二年に太陽年の始まりである夏至点はスキロフォリオン月の十三日であり、メトンの十九周年としてディオドロスによって与えられた日であることを明らかにしている。参照B・D・メリット「五世紀のアテネの暦」八八頁。

(5) ペロポネソス戦争の原因

(第一二巻)三八アテナイでエウテュデモスがアルコンだったとき、ローマ人は執政官の代わりに三人の軍団司令官としてマニウス・アエミリアヌス・マメルクス、ガイウス・ユリウスおよびルキウス・クィンクティウスを選んだ。この年にアテナイ人とペロポネソス人との間で、ペロポネソス戦争がはじまった。その原因を説明しておくことはわれわれの歴史にとって必然的でありまた適切である。

(二)アテナイ人は海での支配権に固執し、デロスに同盟のために集められていた金、ほぼ八千タレントをアテナイへ移し、ペリクレスに守ることを委ねた。かれは生まれ、名声、雄弁家としての能力において同胞の市民にはるかにまさっていた。しばらくした後この金の相当額を自分の考えで使用し、説明を要求されたとき、病気で倒れ、かれが託された金の使

途の説明をすることができなかった。(三)かれがこのことで悩んでいるときに、かれの甥で孤児であり、かれの許で育てられたアルキビアデスが年齢はまだ若かったが、ペリクレスに金の使用の説明をする方法を示した。すなわち、叔父が悩んでいるのを見て、悩みの原因を尋ねた。ペリクレスが、金についての弁明を求められ、市民にそれについての弁明をどのようにしてあたえることができるかその方法を探しているのだ、と言うと、アルキビアデスは弁明をどのようにすべきかではなく、どのようにして、しないかを探すべきだ、と言った。(四)それゆえに、ペリクレスは若者の意見を受け入れて、どのような方法でアテナイ人を大きな戦争に巻き込むことができるかを探した。混乱、都市の気を散らす状況、恐れによって金の使途についての正確な弁明を逃れることができるとかれは考えた。この手段を考えていたとき、ある事件がつぎのような理由で偶然に起こった。

三九アテネ像はペイディアスが制作したのだが、クサンティッポスの息子、ペリクレスはその監督者に任命されていた。ペイディアスの助手のある者がペリクレスの政敵に説得されて、神々の祭壇に嘆願者として座った。その思いがけない行動のために召喚されると、ペイディアスが神殿の多くの金をもっていることを証明しよう、また監督官のペリクレスは知っていてその協力者だと言った。(二)そのために会議が召集され、ペリクレスの政敵はペイディアスを逮捕し、ペリクレス自身を聖物略奪の罪で告訴するよう民衆を説得した。これに加えて、ペリクレスの先生だったソフィストのアナクサゴラスを神々にたいして不敬な行動をしたとして告訴せんとした。かれらがペリクレスを告訴と中傷に巻き込んだのは、妬みのためにこの男の卓越と名声を引き下げることに熱心になっていたからである。

(三)ペリクレスは戦争の間は、民衆はせきたてる必要のために有能な男に尊敬を示すが、暇があるときには妬みのためにおなじ人を不正に告訴することを知っていた。そこで都市が将軍職におけるペリクレスの能力と技量を必要とし、かれへの中傷を受け入れないように、また金についての説明を厳密に調べる暇と時間をもたないためには都市を大きな戦争に巻き込むことが自分にとって有利だと判断した。

(四)メガラ人を市場と港から閉め出そうということ

がアテナイ人の間で決議されたとき、メガラ人は援助を求めてスパルタ人側へと転じた。ラケダイモン人はメガラ人に頼みとされ、同盟会議に応じて公然と使節を送り、アテナイ人にメガラ人にたいする決定を撤回するように命じ、もし従わなければ同盟都市とともに戦争をすると脅した。このために、議会が召集されると、弁論術ですべての同胞市民よりはるかにひいでていたペリクレスは、利益に反してラケダイモン人の命令に従うことは隷属の始まりだと述べて、決議を撤回しないようにアテナイ人を説得した。田舎から所有物を都市に運び込み、海を制圧してスパルタ人にたいして戦い抜こうと助言した。

四〇戦争についてよく考えて論じた後、アテナイの同盟都市の数を数え上げ、海軍力の卓越さ、これらに加えて、デロスからアテナイに移された金の多さを数え上げた。その金は諸都市の共同の目的のために税から集められたものだった。(二)共同の一万タレントから、プロピュライアの建築、ポティダイアの攻囲のために四千タレントが出費された。また毎年同盟都市の税から四百六十タレントが国庫に納められた。ポンペイア、メディアからの戦利品は五百タレントの価値があることを指摘した。(三)神殿には多くの奉納物があることを指摘し、アテネ像は金の五十タレントをもち、装飾のための備品は動かしうることを指摘した。またこれらは緊急の必要が起きたときには神々から借り、平和なときに返すことができることを示した。また市民の生活は長い間の平和のために幸福に向かって大いに進展したことも述べた。

(四)これらの金以外に、同盟都市と要塞にいる守備兵以外に都市には一万二千の重装兵がおり、守備兵と居留外人は一万七千人いて、三段櫂船は三百隻あることを指摘した。(五)またラケダイモン人は金に窮乏していて、海軍力はアテナイ人にはるかに劣っていることを指摘した。こうしたことを詳細に述べて市民を戦争へと駆り立て、ラケダイモン人に注意を払わないように民衆を説得した。演説家としてのすぐれた能力のためにこのことをやすやすとやり遂げ、そのためにかれはオリュンポスの神と呼ばれた。

(六)古典期の喜劇作家アリストファネスはペリクレスの時代の人で、四韻律詩でこのことに言及してい

る。[1]

おゝ、哀れな農夫よ、この言葉を理解せよ
もし、どうして平和がこの国を去ったか
聞きたかったなら。
まずペイディアスがそれをはじめたのだ
拙いことをして。
つぎにペリクレスが非難されるのではと恐れて
メガラ法令という小さな火花を投げ込み
これほどの戦争の火を吹いて燃え上がらせたのだ
その煙ですべてのギリシャ人が涙を流すほどに、
ある者はここで、ある者はあそこで。[2]
そしてふたたびほかの箇所で、
オリュンポスの神々、ペリクレスは
雷光を投げ、雷を鳴らし、
ギリシャを混乱に陥れた。
詩人のエウポリスはつぎのように書いた。[3]

1 『平和』六〇三―六〇六、六〇九―六一一。
2 『アカルニア人』五三一―五三二。
3 『断片』九四、一一　五―七(Kock)。エウポリスはアリストファネスと同時代の人で、古典期の最も華やかな作家の一人だった。

かれの唇には説得力が鎮座している
このように魅了し、雄弁家のうちかれだけが
聴衆に針を残した。

四つの特性、すなわち「知性」、「雄弁」、「祖国愛」、「無私潔癖」としてトゥキュディデスが描くペリクレス、さらにはかれの多くの名演説文を読むことによって陶酔させられ、かれの中に完全に理想的な政治家像をいだいていた者にとって、アンドレ・ボナール『ギリシア文明史』の中でのかれは「帝国主義者」であり、「祖国愛」もただアテナイだけを念頭においた者という指摘は非常に大きな衝撃である。しかしディオドロスのこの記述を読むとなるほどと納得させられる。プルタルコスの『ペリクレス伝』、そしてこのディオドロスの記述を検証しながら、もう少しこのペリクレスという人物を探ってみたいという思いに駆られる。